

野 た巫 わ医 ごの 184

「役所なんて杓子定規なんだから（杓子定規一形式やしきたりにとられて応用や融通の利かないこと）。」よく聞く庶民の言葉である。「いろいろ考え、八方手を尽くしたが、方法も見つからず、どうにもならない。匙を投げるしかない。」これもよく出てくる言葉である。ことに後者にある「匙」は医療職として、とくに医師、薬剤師にとっては治療の中心になる大切な道具の1つである。

元来、匙は平安時代に食事用として大陸（支那大陸）から入ってきたもので、上流社会ではこの匙を

らになったものを「飯匙（イイガイ）」と称した。小型のものは匙と呼ばれるようになり、さらにその用途により、茶道に用いられるものを茶匙、香道に用いられるものを「香匙（こうし）」、医師が薬を盛るために用いられるものを「薬匙（やくさじ）」と呼んで区別されている。

江戸時代には大名の侍医を「おさじ」と呼んでいることもあった様である。又、医師はくすしとも呼ばれる。英語でもmedicineは①薬の意の他に②医学、③内科（内科学）を意味している。「生かすも殺すも匙加減」というのは、この「匙加減：くすりを調合するとき、匙で薬を掬う分量の多少、薬の盛り具合」を言うのであり、引いて医者の手当の仕方、治療を意味するようになった。さらに一般的なことに使い方が広げられ、手加減、手心の意味にもなっている。

その他、食器としてのサジには柄の部分が多くぼんだ「れんげ」と呼ばれるものがある。これは平安時代の「かい」と呼ばれていた頃の名残とも云われている。形が蓮華の花弁に似ているところからである。

また「杓文字（しゃもじ）」という言葉は杓子の後半を略して文字を添えた女房詞が一般化したものである。

「杓子は耳搔（みみかき）にならず」という諺があるが、「大は小を兼ねる」に対する諺で、わが国の文化の一端を示すものであろう。

少し大きいものに「柄杓（ひしゃく）」があるが、例えば神社では、参拝する前に手水舎（ちみずしよ）で手を清める際に用いる、50cm弱の木製の小さいものもある。一般の家庭では植物に水をやる時、ホースの代わりにバケツと柄杓を使ったり、近年では銀座の大通りなどで、夏の暑い最中に少しでも気温を下げようと、先人の知恵である打ち水をするイベントが催され、皆、ゆかたを着て、バケツと柄杓

杓子と匙と柄杓

前田記念腎研究所理事長 前田貞亮

用いて、汁や飯を掬って食べるのが支那（当時は先進国）大陸の人々の風習から流行したようである。当時は匙とは呼ばれず、汁や飯の入る部分が皿の様に中央が凹んでおり、貝殻に似た形であり、杓子を含めて「かい」と呼ばれていた。食器具の「かい」は大型のものは「杓子」、小型のものは「匙」と呼ばれた。恐らく木製や焼き物製の前に、最初は木や竹などの先を裂いて貝殻を挟んで作ったものであったからであろうか、又この呼び名は舟を漕ぐ「櫂（かい）」と似ているからではないであろうか。

鎌倉時代以後は、食事に際しては古来より用いられた箸が中心になり、この食器としての「かい」は大型のもの「杓子」の他には、米飯用に表面の平